

ピステイスを聞く／ラレオーを聞く

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成12年10月30日受理)

πίστις hören / λαλέω hören

Kanji SASAKI

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge,
Kurashiki, Okayama, 701-0193, Japan
(Received on October 30, 2000)*

概 要

ヨハネ8,37b-41a はガラテヤ3,2-7を書き換えたものである。われわれはガラテヤ3,2の「エクス・アコエース・ピステオース」を「ピステイスの聞受により」と解し、「信仰の宣教を通じて」とか「信仰の使信に基づいて」とか等々とは解さない。パウロはここで即自的に、信仰義認の真理は「聞受義認」であるということを教えている。

3,2.5の「ピステイス」は3,25の「ピステイス」である。

ヨハネの書き換えは上のような真理を、その自覚を持って照らし出している。

ガラテヤ3,2.5.25の「ピステイス」はイエスの「ラレオー」である。

Resümee

Joh 8,37b-41a sind eine Art von Umschreibung der Gal 3,2-7. Wir verstehen „ἐξ ἀκοῆς πίστεως“ als „durch das Hören von der Pistis“, nicht als „durch die Predikt von Glauben“, od. „aufgrund der Botschaft des Glaubens“, od. …….

Paulus lehrt hier an sich, die Wahrheit der Glaubensgerechtigkeit sei die „Hörens-gerechtigkeit“.

Die πίστις 3,2.5 ist die in 3,25.

Für sich erleuchtet Johanneische Umschreibung diese Wahrheit.

Die πίστις in Gal 3,2.5.25 ist das λαλέω Jesu.

はじめに

人間の言語宇宙内部に新しい意味産出(シニフィアンス)がなされる場所を、コーラーと規定するクリステヴァの記号論, テクスト理論に学びながら, われわれはヨハネ「福音書」内部の諸言語の様々な生成場面を目撃してきた。8章の「絶望の道」の段落は、『ティマイオス』に語られるように, まさに「箕」が打たれるとき

のザッザ、ザッザという音まで聞こえるような、6 ステップ 3 フェーズの規則正しい震動が続いていて不気味でさえある。この震動の、海原に打ち広がる波頭の群のような見取り図を下に示そう。

フェーズ	<FA>	<FB>	<FC>
[1] 「ユダヤ人」の自己確信のステップ	↓ 8,33	↓ 8,39a	↓ 8,41b
[2] イエスの言葉導入のステップ	↓ 8,34-36	↓ 8,39b α	↓ 8,42a α
[3] 勧めの言葉のステップ	↓ 8,37a	↓ 8,39b β . γ	↓ 8,42a β . γ .b
[4] 罪とする事実の指摘のステップ	↓ 8,37b α	↓ 8,40	↓ —
[5] 罪の原因の開示のステップ	↓ 8,37b β	↓ —	↓ 8,43
[6] 父祖物語のステップ	↓ 8,38	↓ 8,41a	↓ 8,44a

(第1対論) (第2対論) (第3対論)

このコーラーで、イエスに失望しイエス殺害へと転じていく者のコトバが発生する瞬間が呈示される。ところでこの一覧表の<[3] 勧めの言葉のステップ>のテキスト本文を右に向かって、順次 FA, FB, FC と読んでいってみよう。

FA: <君たちは「アブラハムの子孫である」と申し立てるが、わたしはそれを認めよう> [むしろ<そのことを誇りとしなさい> Vgl. 1,47]。

→ FB: <しかし「アブラハムの子」とは生まれとか血によるのではなく「アブラハムの業を為す者」のことである。君たちは「アブラハムの子」であると名乗るなら、「アブラハムの業」を行いなさい>。

→ FC: <しかし「アブラハムの業」で最も大切なのは愛、わたしイエスを愛すること、である>。

このように読み解いてみると、勧めが提示される手順そのものもその内容も、ガラテヤ書のそれと強烈に共鳴してくる。「絶望の段落」の言語世界を解析している過程で、それがガラテヤ書の語句と似たものを多く抱え込んでいることをいぶかしく思っていたわれわれは、上記の三つのフェーズの推移が読み取れたとき、両テキストの内容上の連携を初めて確信したのであった。

6 歩踏まれていく、その開始のステップ、<[1] 「ユダヤ人」の自己確信のステップ>では、「イエスを信じているつもりユダヤ人」が「われわれは XXX である」という自己言及をイエスに向かって発する。【イエスの啓示の言葉としての、イエスの自己言及に対応。「人間」の自己言及が罪そのものであること (Vgl.Gal 6,3) が以下で暴かれていく】

続く四歩のステップは、確信に胸を膨らませている「ユダヤ人」に対し、イエスが彼らの確信の言葉の吟味をされる過程である。その吟味は言葉の内容ではなく彼らの行動の吟味 (Vgl.Gal 6,4) をもって遂行される。【「わたしを信じなくてもその業を信じなさい」 10,38,Vgl. 9,25で代表されるように、9-10章はイエスの「誰」はメシアの概念・イエスの言葉によってではなく、その為す業でこそ知られる、というテーマで貫かれている。上の吟味過程はそれに対応。アイオンの転換期における預言者・人物判定は言葉では為し得ない、というのがヨハネの立場である】

最後のステップである<[6] 父祖物語のステップ>では、「ユダヤ人」たちの「行

為「領導者」(Vgl.Gal 6,1-2)である彼らの「父祖」をイエスが暴き出され、この「行為領導者」をついには「悪魔」であると断罪される。【イエスの自己言及が、その「行為領導者」たる父なる神で終結していることに対応。最後のフェーズでは「ユダヤ人」は罪深い自己愛が父子のエロスの合一の色彩すら放つ「われらの父は神なり」という自己言及に達する。それは形式上はイエスの啓示の言語形式を採ることとなり、内容上は自らの神学上の原理5,18と強烈に矛盾してしまうに至っている】

われわれが繰り返し例示してきた如く、8章、特に「絶望の段落」はガラテヤ書と縦横に対応している。本小論は以下で、上掲〈FA 第六ステップからはじめて FBの全体〉をガラテヤ書の内容と対照する作業を行う。

1. 「イエスが語る」VS「ユダヤ人が行う」という奇妙な対比

上記範囲を解析するにあたって、まず解決しておかなければならない難点がある。このテキスト部分で、イエスの「語り」と「ユダヤ人」の「行為」とが繰り返し対比されている、という奇妙な事態である。これが何を意味しているのか、われわれは長い間考え込まされてきた。8,38を検討しよう。

下記 AA-1の上下二行の精密な対照関係(ギリシア語本文)を一目見た瞬間、誰しもここには何か重大な事柄が込められていると感じざるを得ないであろう。しかし一体、何が対比されているのだろうか。「わたしが見る」と「君たちが聞く」とが対比されているのではないことは AA-2最下行を見れば明らかである。

AA-1

8:38 わたしは 父のもとで見たことを 話している ἄ ἐγὼ ἐώρακα παρὰ τῷ πατρὶ λαλῶ.
そして君たちは 父から聞いたことを 行っている καὶ ὑμεῖς οὖν ἃ ἠκούσατε παρὰ τοῦ πατρὸς ποιεῖτε.

AA-2

8:25彼らが、「あなたは、いったい、どなたですか」と言うと、イエスは言われた。
 「初めからまさにそれを わたしは話している、君たちに。 Τὴν ἀρχὴν ὃ τι καὶ λαλῶ ὑμῖν;
 8:26あなたたちについては、言うべきこと、裁くべきことがたくさんある。
 しかし、わたしをお遣わしになった方は真実であり、
そしてその方から聞いたことをわたしは話している, κἀγὼ ἃ ἤκουσα παρ' αὐτοῦ ταῦτα λαλῶ
世に向かって εἰς τὸν κόσμον.

[a] 見る／聞くについて：われわれが繰り返して述べてきたように始元言語（「存在へと開かれた言語以前」、つまり象徴系がその向こうへと突き破られている場所、そういう場所での言語生成場面）では、視覚聴覚触覚はアルカイックに統合されているのであった。それは身体－精神の統合した姿でもあった。それは人間のロゴス（分節論理とその言語）とイエス・キリストがそれであるところの言（大文字の**ロゴス**）とのアルカイックな分岐点＝「初め」に立っているときの姿であった¹。

従って上でイエスについて語られているのは、「父の家」における父と子の親しい直接的交わりの中での言の受領であることを確認しよう。ここでは単独の「聞く」、単独の「見る」は非ゾーエー的抽象である。その意味で8,26の「わたしは聞いた」はその相手となる半身「わたしは

見た」を包含しているのであり、8,38の「わたしは見た」も相手となる半身を包含していることと同様である(二詞一意)。

このようにして、父の傍らなる子、そこから発出する言においては、「見ることは即ち聞くこと」である。始元における二項関係が、始元ならざる場面にあっても出現している姿が8,38の「見る／聞くの並列」であると考えべきである。イエスの始元的な見る＝聞くの直接性に鮮明に対照されて、「君たちが聞いた」は(前置詞の格支配の相違に全く注目しなくても)遠距離性、間接性、媒介性が著しい。こうして、見る／聞くの問題に関しては、人の子・イエスの、父なる神との関係の「直接性」と、ユダヤ人たちの、父祖の伝承との関係の「遠隔性」が対比されていると結論づけることが出来る。

[b] 話す／行うについて：話す／行うが二項関係をなしている場面を捜してみるとキリスト論が思い当たる。ヨハネ「福音書」は派遣された方キリスト論をベースにして、5-10章の長大物語では8章を境にして預言者キリスト論から救済行為者キリスト論へと移行しているからである。キリスト論における話す／行うは「派遣された方(父なる神)の御心」を話す／行うという構造の中に位置付いている。キリスト論上の話す／行うが「父なる神の御心」の超越性を主題化するのに対照されて、「君たちが行う」は地上的、人間的である。前者の「父」の超越性と、後者の「父」の地上性との対比。同一のシニフィアン「父」が別々のシニフィエを孕んでいるのである(同音異義)。

[c] 「行う」の焦点化について：9章から「メシアの概念からイエスが信じられなくても、イエスの業を信じるべきである」(9,25 Vgl. 10,37-38: 7,40-42)という論点が始まる。「言葉からではなく行為から」推論すること。このことが、イエスについて語られるのに先行して、「イエスを信じているつもりユダヤ人たちの」上に適用されていると考えられる。しかしヨハネ行為論を注意深く検討してみると、行為の「何?」と共に、「誰に導かれて?」が一貫して問われていることがわかる。

行為論は「行為領導者論」を包含している。ここでは、「君たちの行為を領導しているのは君たちの父だ(わたしイエスの父ではない)」という、恐るべきことが宣告されているのである!

[d] イエスの「語り」が「ユダヤ人」たちの「行為」と連結されていることについて：前項[c]の恐るべき宣告の発現の仕方を見つめてみると、「対比」という外見が崩れていることが気付

¹ イエスは常にいまここで、その「初めから」語り続けておられる。イエスの語りの「何?」とは「あなたはどなたですか」との問いへの答えそのものである。ここでのみ「誰が?」と「何を?」とが円環を為し、一つである。象徴言語に幽閉されたわれわれには不可能なことであるが、イエスのこの自己言及のみがその〈自己〉への還帰であり、その〈自己〉の示現なのである——このことはわれわれの告白である。

イエスのこの「初めから」の語りは「事そのもの die Sache selbst」であって特別な術語 *laléō* をもって提示された。人間の象徴言語の世界へのアクセスは預言者ヨハネの証によってはじめて可能となった。イエスの〈*laléō*〉という〈事〉は、さしあたり〈証〉という〈言葉〉による展開を必要とした。イエスにおける〈事〉と〈言葉〉の融合がヨハネ「福音書」で初めて提示されたのが10章冒頭、「羊の囲い」のたとえ話のなかの「声」「声掛け」においてであった。

かれる。8,38の奇妙なディスクールが絶叫している内容は、イエスの「語り」が「ユダヤ人」たちの「行為」に反映していない、「君たちは聞いていない！」ということなのである。

—— わたしが父からの真理を語っても語っても、君たちの行為から推せば君たちは
(わたしの父ならぬ) 君たちの父に領導されている、わたしの言を君たちは聞いていない！

こうしてみると8,38で根本的に問題とされているのは、イエスの言葉が「イエスを信じているつもりユダヤ人」の「言語宇宙の界面」の「外」に留まり続けている、ということである。逆方向から言えば、この「界面」の「内」では、彼らはイエスの父なる神に呼びかけているつもりではあっても、自分の父に（自己愛的に）向かい合っているに過ぎない、ということである。

ところで8,38の「対比」(X)は8,40-41の「対比」(X')と対をなしてXY'Y'X'のヒアスムスが成立していることから重大な意味を持つことになる（後述）。

2. 第一対論末尾から第二対論末尾までの構成

BB

[a]	だが君たちは求めている、わたしを殺すことを というも <u>わたしの言葉</u> が場所を持たないから、君たちの中に。	ἀλλὰ ζητεῖτέ με ἀποκτεῖναι, ὅτι ὁ λόγος ὃ ἐὰν οὐ χωρεῖ ἐν ὑμῖν.
[b] ₁	8:38 <u>わたしが見たことを、父のもとでわたしは語っている。</u>	38 ἄ ἐγὼ εἶδρακα παρὰ τῷ πατρὶ λαλῶ
[b] ₂	ところが、君たちは聞いたことを、父から、 <u>行っている。</u>	καὶ ὑμεῖς οὖν ἃ ἠκούσατε παρὰ τοῦ πατρὸς ποιεῖτε.
[c]	39彼らは答えた、そして言った、彼に 「父、わたしたちの、[それは] <u>アブラハム</u> です」	39 Ἀπεκρίθησαν καὶ εἶπαν αὐτῷ, Ὁ πατὴρ ἡμῶν Ἀβραάμ ἐστίν.
[c']	言われる、彼らに、イエスは。 「もし子ら、アブラハムの、[それで] 君たちがあるなら、 業を、アブラハムの、[それを] 君たちはするはずだ。	λέγει αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς, Εἰ τέκνα τοῦ Ἀβραάμ ἐστε, τὰ ἔργα τοῦ Ἀβραάμ ἐποιεῖτε
[a']	40 今しかし、君たちは <u>求めている、わたしを殺すことを</u> 、人間を、 <u>真理を</u> 君たちに <u>語ったところの</u> 、	40 νῦν δὲ ζητεῖτέ με ἀποκτεῖναι ἄνθρωπον ὃς τὴν ἀλήθειαν ὑμῖν λελάληκα
[b] ₁	<u>神から聞いたところの</u> 。 そんなことは、アブラハムはしなかった。	ἦν ἠκούσα παρὰ τοῦ θεοῦ τοῦτο Ἀβραάμ οὐκ ἐποίησεν.
[b] ₂	8:41君たちは <u>行っている</u> 、業を、父の、君たちの。」	41 ὑμεῖς ποιεῖτε τὰ ἔργα τοῦ πατρὸς ὑμῶν.

この箇所の解析のために既に多くのことをわれわれは調べ上げてきた。項目的に再確認しておこう

[1]: 「君たち」に対するわたしの判断は、君たちが何をしているかである。

[2]: 「君たち」の行為からわたしが知るのは、「何を為すか」だけではなく

「誰が君の行為を領導しているか」である（近代の自我の行為論においては理性的であるか情感的であるか、となろう。因みにパウロ的には霊か肉かであった）。

[3]: わたしは「わたしの父」のもとで見て=聞いた真理をラレオーしている。

[4]: 「君たちの行為」から推論するに、「君たちの行為」の領導者は「君たちの父」である。

(「君たち」は「わたしの父」に呼びかけ訴えていると思っているが、それは「わたしの父」についての「言語宇宙の界面」内部の「君たち」の表象＝「君たちの父」である)

[5]: つまり「君たち」はわたしのラレオーが全く聞こえていないのだ。「聞受義認論」からの断罪

(パウロなら言うだろう、「わたしが走ってきたのは全く無駄だったのか」)

[6]: 「君たち」は自分たちの父がアブラハムであると主張するが、「アブラハムの子」の真の定義を「君たち」は知らない。
——以下9-10頁と対照

[AA]: 「アブラハムの子」の真の定義とは「アブラハムの業を為す者」のことである。

[BB]: 「君たちの行為」はどのような観点から判断されるかを知るべきである。

「君たちの行為」は「行為領導者がわたしイエスであるか否か」が問題なのである。

(「君たち」はアブラハムではなく「君たち」自身が大切なのである、

「君たち」は「自分から語る者」である)

[CC]: [a] → [b₁] → [b₂] の推転は、

「君たち」はわたしを殺そうとしている (「君たち」を訪れるであろう呪われた現実)

→ 「君たち」の行為は呪いを準備するものであって、救いの条件になるはずもない。

→ 「君たち」はわたしのラレオーを聞くべきである。——「聞受義認論」

[DD]: [a] [b₁] [b₂] → [c] [c'] → [a'] [b'₁] [b'₂] の推転における中項の役割は

始項、末項は「君たちの罪の指摘と、この罪の原因の提示」であり、中項は「今の君たち」の視野がこの「罪と罪の原因」からどれだけ塞がれてしまっているか、そしてそれが「君たち」の罪をどれほど如実に示すものとなっているか、を示す。

(君たちは自分の罪を糊塗するためにアブラハムとの血のつながりを持ち出す、それは自らの罪を肉で仕上げるものである。)

3. ピスティスを「聞く」VS 律法を「行う」という根本的な対比、これとヨハネの「語る」VS 「行う」の対比との対照

パウロのいわゆる信仰義認における根本的な対比 (下記右欄) に眼を転じてみよう。

CC ヨハネ「福音書」

ガラテヤ書

<p>8:38 わたしが父のもとで見たことを、わたしは語っているところ、 君たちは父から聞いたことを、行っている。」</p> <p>8:40 だが今君たちは求めている、わたしを殺すことを、人間を、 真理を君たちに語ったところの、 神から聞いたところの。 そんなことは、アブラハムはしなかった。</p> <p>8:41 君たちは行っている、君たちの父の業を。」</p>	<p>3:2 一つだけ君たちに聞いて確かめたい。 律法を行うことによって、「霊」を君たちは受けたのですか、 それとも、ピスティスを聞くことによってですか。</p> <p>3:5 どうか、君たちに「霊」を授け、 また、君たちの間で奇跡を行われる方は、 律法を行うことによって、[そうなさるのでしょうか。] それとも、ピスティスを聞くことによってですか。</p>
---	---

38 ἄ ἐγὼ εἶδρακα παρὰ τῷ πατρὶ λαλῶ καὶ ὑμεῖς οὖν ἃ ἠκούσατε παρὰ τοῦ πατρὸς ποιεῖτε.	3.2 τοῦτο μόνον θέλω μαθεῖν ἀφ' ὑμῶν ἐξ ἔργων νόμου τὸ πνεῦμα ἐλάβετε ἢ ἐξ ἀκοῆς πίστεως;
40 νῦν δὲ ζητεῖτέ με ἃ ποκτεῖναι ἄνθρωπον ὅς τὴν ἀλήθειαν ὑμῖν λελάληκα ἣν ἠκουσα παρὰ τοῦ θεοῦ τοῦτο Ἀβραὰμ οὐκ ἐποίησεν. 41 ὑμεῖς ποιεῖτε τὰ ἔργα τοῦ πατρὸς ὑμῶν	3.5 ὁ οὖν ἐπιχορηγῶν ὑμῖν τὸ πνεῦμα καὶ ἐνεργῶν δυνάμεις ἐν ὑμῖν, ἐξ ἔργων νόμου ἢ ἐξ ἀκοῆς πίστεως;

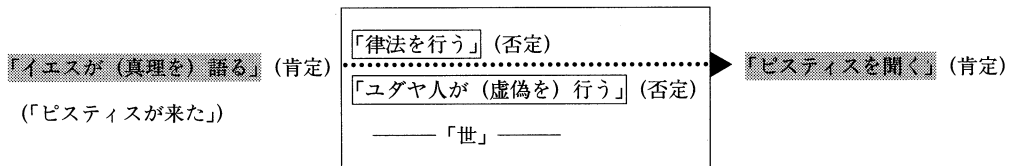
ガラテヤ書三章の冒頭に極めて鮮明な X-Y-Y'-X' のヒアスムスが呈示されている。V2-V3-V4-V5 がそれである。このヒアスムスが發揮する力は YY' 部（上掲引用部では省略）の弱々しさ頼りなさに対比された、外柱 X と X' 部の強靱な構造的同一性にある。X と X' の内部では

(I) 「律法を行う」 (否定) と 「ピスティスを聞く」 (肯定)

という否定項と肯定項の二項対立が、価値ある方の項を選択するよう指示しながら、語られている。さて、このテキストとわれわれが対照するヨハネテキストもまた、X-Y-Y'-X' のヒアスムスを呈示していて、この外柱 X と X' の内部においてもまた、価値的に否定されるべきもの、肯定されるべきものの二項対立で構成されている。外柱内部の二項対立は、それを構成する否定項と肯定項の順序が転換していることによって、そして動詞の目的語の対比が一転して主語の対比へと拡大されることによって相互の対照はまことに深いものとなっている。X と X' の内部にある対立二項をヨハネテキストに挙げられているままの順序に、しかし「行う」(否定)の高さを上記(I)とそろえて、下に記載してみよう。

(II) 「イエスが語る」 (肯定) と 「ユダヤ人が行う」 (否定)

律法の業を行うことを良しとする「律法の下」(Gal 4,4) なる「世」へと、「ピスティスが来た」(Gal 3,25) という類像性が成立している。上記 (I), (II) を下図のように重ねてみる。



このように見てきて、われわれが上で考察してきたことをもう一度振り返るならば、上掲第2章での「イエスが語る」VS「ユダヤ人が行う」の奇妙な対比は、あのテキスト内部で語用論的に、イエスの勧めの言葉を受信者が自分の場で構築するよう「挑発」しているのであることが分かる（イエスにおいて「語る」とは即ち「行う」である）。

イエスの勧めの言葉

わたしは神に聞いてこれを君たちに語る。

君たちはわたしに聞いて これに明るんで愛の業を行う

聞くことを得て、人が父と子の交わりへと受容されたとき（聞受義認）の姿がこれである。

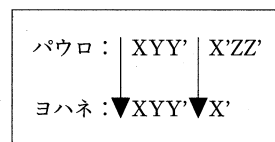
ここでは直説法がふさわしい。

ヨハネ「福音書」では「下から」、「自分から」のものが自分の罪に死に、「上から」、「神から」へと転ぜられた者のみが、イエスの声に共振する（振動数をそなえた）存在を得ている。この者のみが「聞く」ことが可能なのである（賜物としての〈同じものが同じものを〉の原理）。

両テキストの二つのヒヤスマスがこのように対照しうることを確認した後、われわれはつぎに、両テキストをもう少し広いズームで、テキスト移動の動きの中で対照してみたい。

4. 第二対論とガラテヤ書3,2-7との対照

上記範囲でのヒヤスマスの配置は右図のように強力に対応している。ここに ZZ' とは、パウロテキストの直後の部分である。ところでパウロの ZZ' は「アブラハムの子」ということのパウロによる〈新しい・真の〉定義（ルターのトロースそのもの！）であり、これに



対照的にヨハネの YY' もまた、「アブラハムの子」ということのヨハネによる〈新しい・真の〉定義（＝アブラハムの業を為す者）であった。

すると上記ヨハネのヒヤスマス XY Y' X' の成立はその全項がパウロテキストに依拠していることになる。第一にヨハネの XX' はパウロの XX' 内部の強力な二項対立と対照的に成立しており、第二にヨハネのヒヤスマスのうちの残り YY' は、パウロの ZZ' における「アブラハムの子」の定義と対照的に成立しているのである。なおパウロの YY' はヨハネ6,63に転送されて、その形がはっきりと保存されている。

以下、新共同訳を、配置上の整形ならびに「ピスティスを聞く」の箇所を除いては出来るだけ維持したままで、両テキストの対照を行う。これは両テキストの対照を日本語で大観するためのものである。ギリシア語本文の厳密な読みについては上掲記述を検討されたい。上述（6頁）の考察（[AA]～[DD]）と9-10頁の考察（[AA]～[DD]）とを入念に対照されたい。

この対照関係は主要には以下のような対照関係を背景にして成立しているものである。

- ①「自らの言葉の淵源が何であるか、そして何でないか」（ヨハネ7,16-17：ガラテヤ1,11-12）
- ②「自らの言葉をどのように受領したか」（ヨハネ8,26.38/6,38-40：ガラテヤ1,15-16a）
- ③「自らの言葉において語っているのは誰か」（ヨハネ8,28/10,17.18：ガラテヤ2,19-20）
- ④「自らの言葉の淵源に立つ存在者と自らの存在との交わり」（ヨハネ10,14-15/8,45-46b：ガラテヤ4,9a/4,16）

DD ヨハネ「福音書」

ガラテヤ書

<p>だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。 わたしの言葉を受け入れないからである 8:38 わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、 あなたたちは父から聞いたことを<u>行っている</u>。」</p>	<p>X X</p>	<p>3:2 あなたがたに一つだけ確かめたい。 あなたがたが“<u>霊</u>”を受けたのは、 律法を<u>行った</u>からですか。それとも、 ピステイスを<u>聞いた</u>からですか。</p>
<p>8:39a 答えて彼らは言った、 「わたしたちの父はアブラハムです」、 8:39b イエスは彼らに言われる。 「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはず だ。</p>	<p>Y Y'</p>	<p>3:3 あなたがたは、それほど物分かりが悪く、 “<u>霊</u>” <i>πνεῦμα</i> によって始めたのに、 肉 <i>σάρξ</i> によって仕上げようとするのですか。 3:4 あれほどのことを体験したのは、無駄だったのですか。 無駄であったはずはないでしょうに……。</p>
<p>8:40 ところが、今、あなたたちは、 このわたしを、殺そうとしている。 <u>神から聞いた真理をあなたたちに語っている</u> アブラハムはそんなことはしなかった。 8:41a あなたたちは、自分の父と同じ業をしている。」</p>	<p>X' X'</p>	<p>3:5 あなたがたに“<u>霊</u>”を授け、 また、あなたがたの間で奇跡を行われる方は、 あなたがたが律法を<u>行った</u>から、 そうなさるのでしょいか。 それともあなたがたがピステイスを<u>聞いた</u>からですか。</p>
<p>..... 6:63 命を与えるのは“<u>霊</u>” <i>πνεῦμα</i> である。 肉 <i>σάρξ</i> は何の役にも立たない。 わたしがあなたがたに話した言葉は<u>霊</u>であり、命である。 <i>τὰ ῥήματα ἃ ἐγὼ λελάληκα ὑμῖν</i> <i>πνεῦμά ἐστιν καὶ ζωὴ ἐστιν.</i></p>	<p>Z Z'</p>	<p>3:6 それは、 「アブラハムは神を信じた。 それは彼の義と認められた」 とされているとおりです。 3:7 だから、信仰によって生きる人々こそ、 アブラハムの子であるとわきまえなさい。</p>

ヨハネのテキストはガラテヤ書のデフォルメであることが歴然としていられる。

[AA]：ガラテヤ書の ZZ' における「アブラハムの子」の定義＝「信仰によって生きる者」

これを6頁 [AA] のように変更。

「アブラハムの信仰」を「アブラハムの業」へと転換したことが、ヨハネのデフォルメの核心点である。

それはパウロ神学の変更というより、パウロ神学の神髄への突入であると考えられる。

[BB]：ガラテヤ書3,2-7の範囲の「行為」は「霊の受領の条件であるか否か」の観点から見られているが、これを6頁 [BB] のように変更。

つまり「君たちの行為」はイエスのラレオーを受領して、その体内化された音で明るんでいるか否かで判断される。

[CC]：ガラテヤ書の X 内部の三段階の推転は、

「君たち」はかつて“霊”を受けたではないか（「君たち」をかつて訪れた祝福された現実）

→「君たち」の行為がこの現実をもたらしたのではない。

→「君たち」がピスティスを聞いた（新共同訳「福音を聞いて信じた」）ことがこの現実をもたらしたのだ
—「信仰義認論」

これを6頁[CC]のように変更。両者をもう一度念入りに対比されたい。

[DD]: ガラテヤ書 $X \rightarrow YY' \rightarrow X'$ の推転における中項の役割は

始項, 末項は「君たちの過去の祝福状態の指摘と, その祝福の原因の提示」であり, 中項は「今の君たち」の視野がこの「祝福とその原因」からどれだけかけはなれているか, を示す。「君たち」の方向違いの思いなしを叱正し, 立ち帰りへと励ます。これを6頁[DD]のように変更。「過去の祝福状態」(パウロ)が「将来の呪われた状態」(ヨハネ)へと強烈に転換されていることに注目されたい。

以上のヨハネテキストとの対照からすれば,

「ピスティスを聞く」とはとりもなおさず「人の子・イエスを聞く」ということである, と理解すること

このことが, パウロの「聞く」の神髄に迫る所以であるとわれわれは確信する。

「人の子・イエスを聞く」ということを膨らませて「イエスのラレオーを聞く」とすれば, なお真実の深みへと歩みを進めた思いがする。

ガラテヤ書の「ピスティス」がイエス, イエスの声, イエスのもたらす光を connote していることの実態の分析はここでは行わない。しかしこの connotation を前提にした上で, 例えば上掲 DD, Z の場面に思いを留めてみよう。そのうえで「ピスティスとアブラハムとはどちらが早く到来したのか」と問うてみよう。そうするとヨハネ共同体が, 「アブラハムが生まれる前から『わたしはある』」(ヨハネ8,58)とのイエスの言葉を聞いたと告げることが自然なことと了解できよう。

イエスのラレオーされたことの真実が, イエスが上げられるときに, イエスを信じる者に分かるとされている(8,28)ときの, その術語ラレオー。このヨハネ神学の基幹をなす術語の一つの根本的な淵源がパウロ神学の〈ピスティスを聞く〉にあることはもはや紛れもない。この〈ピスティスを聞く〉を承けてヨハネ神学は「イエスのラレオーを聞く」とし, 「聞いて知る」とも「聞いて従う」とも展開される(10章は「従う」が断然優勢である)。

8章では「聞いた」ことがどの方向へと展開していくかを敢えて示さない。むしろ逆に, 日常言語世界の中に絡め取られている人間には, (自分の欲求とは父祖の欲求なのだから8,44)「父祖の語りを聞いてこれに基づいて行動すること」が, 自らの言語宇宙の界面を突破して超越へ向かうことを妨げ, こうしてイエスへの対抗を強めるものであることこそを, 8章末尾は知らしめようとしているのである。

〈ピスティスを聞く〉に「信じる」が付加されないと不安になる解釈は, 〈言葉の重ね合わせによる内容殺害=作品制作という付加〉を求める欲求である。

関連拙論

- 佐々木寛治：『ある奇跡物語の転倒——ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [III-1]』
中国短期大学 紀要 第30号 1999 『転倒』
- 『テキスト重層性についてのレジュメ “Doubling”-Topix-Isotopie 新しいテキスト記号論 Semegesis に向けて』 日本新約聖書学会第39回大会口頭発表付属論文 1999 『重層』
- 『悪魔の $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ とイエスの $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ ——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\acute{\iota}\nu$ [III-2 α]』
川崎医学会誌一般教養篇第25号 1999 『悪魔』
- 『二つの時代の法廷物語をつなぐもの——「神の法廷」顕現物語成立に対する申命記18,20-22の寄与——ヨハネ「福音書」9-10章における術語 $\lambda\alpha\lambda\epsilon\acute{\iota}\nu$ [III-2 β]』
川崎医学会誌一般教養篇第25号 1999 『法廷』
- 『ヨハネ「福音書」のレトリック構造について術語—— $\lambda\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ 探求の途上にて』
ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究会口頭発表提出論文 1999 『レトリック』
- 『こう言って彼は手とわき腹をお見せになった——ヨハネ「福音書」20,19-29研究——』
中国短期大学 紀要 第30号 2000 『わき腹』
- 『ヨハネ「福音書」「絶望の道」段落8,31-47に孕まれた言語＝律法理論——その解明の途上から』
関西新約聖書学会第41回大会口頭発表提出論文 2000 『律法』
- 『言語生成論の観点よりヨハネ8,31-47をガラテヤ書と対照する』
日本新約聖書学会第40回大会口頭発表提出論文 2000 『ガラテヤ』
- 『イエスを呼び求める者、イエスを証する者、イエスを殺す者——それぞれの者たちの言語の生成』
ヘーゲル研究会（岩波哲男・加藤尚武世話人）第43回研究発表会口頭発表提出論文 2000 『諸種言語』